聖地のこどもニュース

# オリーブの木

No.58
2015年 11月

▲昨年のガザ攻撃で破壊され、プレハブで再建されたガザの小学校。

イスラエルとパレスチナ、小さな国で二つの民族が紛争を繰り広げてもう100年になります。事態は数週間前からまた緊迫し、多数の犠牲者が出ています。暴力と復讐の連鎖がとまらず、とくにエルサレムヨルダン川西岸地区に不安が蔓延しています。今回、今までと違うのは、イスラエル人を襲うパレスチナ人には10代前半の少年が多いこと、イスラエルの警官や兵士はそのような少年を容赦なく射殺していること、また互いの憎悪を煽り立てる情報合戦がフェイスブックやYouTubeなどを通じて行われていることです。

私たちの「平和の架け橋」プロジェクトに参加し、互いに「友」になった若者たちは今、何を思っているのでしょうか？　未来を担う子どもたちの平和教育の大切さを痛感しています。大海の一滴のような活動ですが、それでも皆様のご支援があるからこそ。これからもよろしくお願いいたします。

井上 弘子　スタッフ一同

認定NPO法人
聖地のこどもを支える会

当NPOは、国際協力NGOセンター（JANIC）によるアカウンタビリティ・セルフチェックを受け、基準の4分野（組織運営・事業実施・会計・情報公開）について適正に運営されていると審査されました。
Accountability Self-Check 2012

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502　Email ispalejpn@gmail.com　TEL/FAX 03-6908-6571

当法人への支援は…　郵便振替 00180-4-88173　加入者名「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

ホームページからクレジット決済でもご支援いただけます　http://seichi-no-kodomo.org

聖地の子どもたちの教育支援に現地で携わる
〈連帯事務局〉からのメッセージをご紹介します

# パレスチナでは子どもの数は多い。しかし子どもらしい生活は？

聖地におけるカトリック学校・
学院のための連帯事務局
連帯事務局長
クラウディオ・マイナ

世界中の紛争地に暮らす子どもや若者は日々逃れようのない障壁に直面し、彼らの持つ素晴らしい能力を伸ばすことができず、したがって夢を実現できないでいます。

パレスチナの子どもや若者にとってはこの状況はさらに厳しく、ことばでは言い尽くせません。イスラエルとパレスチナは長年戦争や紛争を体験してきましたが、今年2015年の10月初めからは、この10年間では最も厳しい緊迫した状態が続いています。

とくにヨルダン川西岸地区と東エルサレムではどこでも、対立が激化し、日に日に互いの憎悪や復讐感情が高まっていて、明らかに日常生活の安全が脅かされています。この事態で最も影響を受けるのは人々の経済状況です。現在、過去最高の数のパレスチナ人がイスラエルで働いているのですが、これでまた失業率がはね上がり、困窮状態に陥るのは明らかです。さらに重大なことは、この結果として、子どもたちの教育が直接の悪影響を受けることです。多くの子どもたちは通学もできず、学業もおろそかになっています。ヨルダン川西岸地区とエルサレムの間に何百というチェックポイントが設けられており、東エルサレムだけでも、地区と地区、通りと通りを分断するために24ものチェックポイントがあるからです。通行の自由が制限され、通学の途中で攻撃を受ける危険があり、警察の介入によって子どもや若者が逮捕されています。このような危険を避けるために普段の何倍もの時間をかけて遠回りをしなければなりません。想像していただけるでしょうか？ヨルダン川西岸地区およびガザ地区のUNICEF代表、ピエール･プパールはこう言いました。「パレスチナのすべての子どもたちは、心のストレスにさらされている。彼らは不当な重すぎる犠牲を払わされているのだ」と。

▲パレスチナ子どもオーケストラ（西岸地区）

とはいえ、苦しみだけに覆われてはいません。パレスチナの子どもたちは勉強も遊びも音楽も大好きです。生きることそのものを謳歌しています。一つの例をご紹介しましょう。80人の子どもや若者で編成されたパレスチナ子どもオーケストラのレベルは、世界中の同様のオーケストラに比べて決して引けを取らないと評価されています。この紛争の地にあって、バイオリンやフルートやチェロの音が聞こえるのは、ほとんど「奇跡的」といってもいいでしょう。

「聖地のこどもを支える会」の長年にわたる教育支援と里親プログラムのおかげで、数多くの恵まれない子どもたちや若者たちの生活の質が向上しました。「ぼくはお医者さんになりたい」「ぼくはサッカー選手になりたい」「私は看護師になりたい」「ぼくはパイロットになりたい」など、パレスチナの子どもたちも世界中の子どもたちと同じ夢を持っています。

彼らは、皆様のおかげで、きっとそれぞれの夢を実現し、自分の持てる力を発揮できるよう、学んでいくでしょう。彼らの道には数々の障害がありますが、支援者の方々の精神的、経済的ご支援のおかげで、希望の道が開けてくるでしょう。

心から感謝いたします。

# 緊迫の聖地に暮らして思うこと

新 直己 神父（フランシスコ会）

支援者の皆様、こんにちは。私は聖地エルサレムに赴任して2年近くになります。

イスラエル･パレスチナ紛争が数週間前から緊迫の度を加えています。現状について少し思いつくままに書いて皆様にお知らせしたいと思います。

今回の一連の事態の発端は、いつものように神殿の丘あたりで発生したユダヤ人とパレスチナ人の小競り合いでした。それが東エルサレムへ、そして西岸地区だけでなくイスラエル各地に、ここ数週間の間に飛び火してしまったのです。第三次インティファーダかとも言われていますが、そうならないことを願っています。

今回の特徴は、パレスチナ人が刃物でユダヤ人を斬りつけるといった場合が多く、それに対して警察官や兵士が「犯人?」（10代前半が目立ちます）を即座に、撃ち殺してしまうようなケースが多くあります。このような事件は、ほとんど連日のようにどこかで起きています。大変気になるのは、「犯人?」に対して一様に”テロリスト”という言葉を使っていることです。確かにそうかもしれないし、犯罪は許されませんが、一概にそのような言葉で片づけられないようにも思います。

今回の特徴ともいえる、十代前半の若年層がなぜそのよう行動を起こすのでしょうか。そしてなぜヨルダン川西岸地区だけでなく、イスラエルの各都市でも起きているのでしょうか。イスラエル国籍アラブの人々の間にも反イスラエル感情があるのでしょう。いずれにしてもこの先どのような展開が待ち受けているのかわかりません。恐らく、しばらくはこのような状態が長引くのではないかと懸念しています。

とはいえ、私が今住んでいるエルサレム郊外のエイン･カレムは今日ものどかです。本当です。エルサレム旧市街（８ｋｍほどの距離）で起きていることが嘘のようです。この村は洗礼者ヨハネの生まれた地と言われ、森に囲まれた風光明媚なところで、１９４８年のイスラエル建国までアラブの村だったようです。今は教会前の一家族を除いて、ほとんどがユダヤ住民です。エルサレム中心街と違って、どちらかというともっと世俗的な雰囲気です。安息日でもレストランやカフェが開いているため、週日はキリスト教徒の巡礼者が、そして週末はイスラエル全国から訪れる人が絶えないのですが、時々こんなのんびりしていていいのかと焦りも感じています。

私はボランティアとしてしばしばシスターの経営している障害者児童施設に行っています。先日帰り際に、たまたま休憩室をのぞいてみたら、アラブ系の職員がアラビア語放送の番組が見ていました。もちろんことばの意味は全く分りませんでしたが、映像にはイスラエルとの対立で犠牲になった人たちの痛ましい姿がずっと映し出されていました。それを見て非常に悲しくなりました。

この施設には、入所児童の中にも職員の中にもアラブ人とユダヤ人もいます。ボランティアは世界各地から来ています。宗教も背景もさまざま、それでもみんな障害児のために一緒に一生懸命働いています。でもあのような番組（もちろんパレスチナ側からすれば当然かもしれないし、犠牲者には哀悼の念を覚えるのですが）をこの施設の人々が見続ければ、今まで保たれていた良い関係に影響するのではと思い、悲しくなりました。

もっともここの人々は何度もそのような経験をしてきているはず、パレスチナ･イスラエル双方にも平和を固く保ち続けたいと望んでいる人々がいるのも事実です。

エルサレムにいて感じるのは、お互いの間の壁

です。エルサレムには世界中からありとあらゆる人が来るのですが、私の印象は、隣同士、人種、文化、宗教などの違う人たちが住んでいるのに お互いに接点がない。恐れのためか、異文化の人は信頼できないためか。お互いの間に壁があることを感じます。その向こうには自分と同じ人間が住んでいると言えればいいのですが、まだまだモンスターなのかもしれません。あのような放送はそんな対立感情をますます煽ってしまいそうに思うのです。

この点から見ても、「聖地のこどもを支える会」の活動は、非常に意味深いことだと思います。このような事態になってくると、お互いに信頼し、友情を育むことがいかに大切かと痛感します。壁の向こうに住んでいるのはテロリストでも怪物でもなく、笑いもするし、涙も流す同じ人間。きっとこの世が少し面白くなるように神様がちょっと違うように造られただけ。もしお互いに友達になるなら、そして家族の一員になるなら、自分の体の一部になってしまうなら、憎むことなんてできないはず。今の対立がどれほど続くのか、もっと悲しい出来事が起こるのか、予測はできません。しかし至る所に本当に平和を願っている人たちがいて、何があってもそれを諦めないなら、ずっと後の世代かもしれませんが、いつか必ず願いは叶うはずです。シオニズムの父であるテオドール·ヘルツェルはこう言います。「もし望むなら、それはすでに夢物語ではなくなる」

聖地に住んでいても全く無力な自分は、ただイスラエル、パレスチナ両国民が当たり前のようにお互いに違いを認め、尊敬し合って共に一つの地で暮らせる日が来ることを願うばかりです。

## 両側から話を聞くことで

植田 陽香（パレスチナ・ビルゼイト大学留学生）

「必ずまた戻ってこよう!」 そう心に刻んだイスラエル·パレスチナ。

2014年3月にスタディツアーで初めて訪れ、約一年半経って、ようやくこの地に帰ってくることができました。今年の8月末から、パレスチナ自治区ラマッラ近郊のビルゼイト大学に留学をしています。ビザの更新次第ですが、可能ならば来年の夏まで、約1年こちらに滞在するつもりです。

こちらに来て最初の一か月は、驚くほど平穏に過ごすことができました。大学から紹介されたアパートはとても快適。自分の部屋から眺める景色はのどかで、誤解を恐れずに言うと、平和そのもののように感じられました。「ここに住んでいると、苦しんでいる人や困っている人がいることが信じられないし、想像できない。」と、オランダ人のルームメイトが話していたのを思い出します。

しかし、「平和」かのように思われた私の留学生活は、突然終わりを告げます。

ご存じの方も多いと思いますが、現在、イスラエル·パレスチナの情勢は悪化し、緊張が高まっています。9月に聖地「神殿の丘」を巡って衝突が起き、その後、デモや衝突は各地に広がりました。死者負傷者の数は増えるばかりです。幸いにも、私の家の近くでは衝突は起こっておらず、見かけは以前と変わらない「普通の」生活を送っています。しかし、私がエルサレムに行く際にいつも利用するカランディア検問所や、留学先の大学付近といった自分の生活圏内でも衝突が起こっています。実際にその時の映像や写真を初めて見たとき、恐怖で顔が青ざめました。また、メディアの「第三次インティファーダが始まる懸念あり」という報道を目にし、自分の身を案じるとともに、プロジェクトで出会った、イスラエル人、パレスチナ人の友人一人ひとりの顔が頭に浮かびました。

情勢が悪化し、私のことを心配して一番に連絡をくれたのは、プロジェクトで出会ったイスラエル人の友人で、彼女はその後も何度か「大丈夫？エルサレムに行くときは一人で歩いては絶対に駄目だよ。」と温かいメッセージをくれました。本当に私のことを思って、気にかけてくれていることが伝わり、心強く感じ、大きく励まされました。イスラエル人を標的とする殺傷事件が相次いで起こっているため、私の方も彼女たちを心配し、くれぐれも気を付けてとメッセージを送ると、「とても怖いよ。護身用に催涙スプレーを買ったから少し安心できる。彼らは私たちを殺したがっている、ユダヤ人だからという理由だけで！　狂っている！」と返信が来ました。私は暴力を正当化したくないし、彼女がどれだけ怖がっているのかも察することができます。しかしそれでも、「狂っている」パレスチナ人が、「ユダヤ人だからという理由だけで」、今回の事件を起こしていると考えることはできないし、このように理解すると平和への道は完全に閉ざされてしまうでしょう。

一方で、ヘブロンに住むパレスチナ人の友人からは、「イスラエルはここの住民みんなに、銃を撃ってくる。ユダヤ人は殺人者だ！」というメッセージを受け取りました。

このような言葉を、友人から聞くたびにやるせないし、板挟みになっているような気分になります。イスラエルに行ってもパレスチナに行っても、友人やその家族からいつも温かく迎えてもらう私にとって、「狂っている」パレスチナ人、「殺人者」であるユダヤ人という言葉はどうしても受け入れられないし、心から悲しいのです。パレスチナの友人から紛争について語られたとき、イスラエルに友人を持つ私はなんだか自分を裏切り者のように感じるし、逆もまた然り。両側に友人を持つことで大きなジレンマを抱えていますが、それでも私は彼らと良き友であり続けたいし、両側から話を聞くことによって自分なりに平和への糸口を探していきたいと考えています。

# 和平への希望が見いだせない今、交流の意味は

村上 宏一（当法人理事・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

イスラエル人とパレスチナ人の衝突が頻繁に報じられるようになってきました。日本では目立った報道が少なく、大きな関心は呼んでいないように思われますが、10月だけで衝突により双方に60人以上の死者が出たほか、パレスチナ側ではイスラエル治安部隊の銃撃や催涙弾による負傷者が5千人を超えるともいわれています。

衝突が広がった大きなきっかけの一つは、9月27日にエルサレム旧市街の「ハラム・アッシャリフ」というイスラム教聖地で、パレスチナ人の若者らが投石、イスラエル警察がゴム弾などを発射した事件。この日はイスラム教の犠牲祭「イードアルアドハ」の最終日であると同時に、ユダヤ人の「スコート（仮庵の祭）」が夕方から始まる日でもありました。パレスチナ人の熱心なイスラム教徒の間には、スコート期間中に自分たちの聖地にユダヤ人たちが押しかけるというううわさが広がり、守りを固めようと、石を集め敷地内に泊まり込むなどの準備を始めていたといわれています。

ハラム・アッシャリフは、旧約聖書によるとアブラハムが息子イサクを神に捧げようとした場所とされ、またソロモン王が神殿を建てた所だというので、ユダヤ教徒にとっても聖地であり「神殿の丘」と呼んでいます。この両宗教に縁の深い場所に新たなユダヤ教の神殿を建てようと試みる過激な集団があり、その集団がユダヤ暦の新年（2015年は9月14日夕から）に神殿の丘を訪れようと呼びかけていたことが、パレスチナ側に憶

測を呼んだのです。パレスチナ人とイスラエル治安部隊の衝突は、この新年入りの時から既に起きています。パレスチナ人が、聖地アルアクサ・モスクが一時封鎖されたことに反発し、加えてイスラム教犠牲祭の宗教心の高まりの中でさらに衝突が激しくなったのだと思われます。
このように宗教的にデリケートな場所で、しかも宗教的気運が盛り上がる時期での衝突だっただけに「聖地を巡る対立」に焦点が当てられますが、問題の背景には、和平にまったく進展が見られない中でパレスチナ人が将来に希望を見いだせない閉塞状況があります。

例えば、和平の妨げになるとしてパレスチナ側だけでなく、仲介役の欧米の政府なども批判しているヨルダン川西岸のユダヤ人入植地問題一つをとっても、イスラエル側は入植拡大をやめず、交渉再開の可能性を阻んでいます。入植地の存在はパレスチナ人の自治区間の往来を阻害するほか、日常の生活を脅かす例もあります。7月末のこと、西岸北部の自治区ナブルス近郊で、近くの入植地のユダヤ教過激派がパレスチナ人の民家に放火し、1歳の幼児が死亡、両親が負傷（後に死亡）する事件がありました。その報復かどうかわかりませんが、ナブルス近くで10月初めに別の入植地の夫婦が車で移動中に撃たれて死亡する事件も起きるなど、聖地以外でも暴力の応酬が続いています。

イスラエルの協同体キブツに40年ほど暮らし、イスラエル社会を見続けてきた日本人女性は、最近の情勢を次のように伝えてきました。

「ご存知だと思いますが、この約1か月間（9月から10月にかけて）、毎日のようにテロ活動が続いています。イスラエル全域がテロの目標になっています。100年のユダヤ・アラブ紛争に解決のめどがないことに絶望したのでしょうか。組織的な闘争ではなく、イスラエルのアラブ人とパレスチナ人が個人のイニシアティブで、ナイフと石でテロ活動を始めました。13才から18才の男女がテロ活動に参加しているのです。シャバク（情報収集組織）、警察も軍隊も感知できない新型のテロ活動です。今週は、車によるひき殺しが加わりました。

ユダヤ人、イスラエルのアラブ人とパレスチナ人がお互いに警戒心と恐怖感を持って生活しています。銃の所有許可のある人は所持して外出するよう『おふれ』も出ているのです。最近のニュースによると、イスラエルのアラブ人の若者が『イスラム国』で訓練を積んで帰国しているとか。帰国した時点でこれらの若者は逮捕されているようですが、予断は許されません。」

伝え聞く情報の中で気になったのは、パレスチナ人らが絶望の果てに個人の意思でテロ活動に走っているのではないか、という見方がされている点です。1993年の自治協定でパレスチナ自治区が生まれ、一定の自治が実現したものの、前述のように入植地は拡大しても自治区は広がらず、若者の大半は和平交渉の進展など見たこともありません。武力で圧倒的に勝るイスラエルに封じ込められて流通が制約され、経済的な発展の見通しはなく、パレスチナ国家建設の端緒もつかめないままです。


## 支援金の自動払込が より便利に！

ご好評をいただいている郵貯自動払込に加え
クレジットカードでの払込みが可能になりました。
ぜひご利用ください。

＊ 毎回 郵便局へ払込みに行く手間が省けます。
＊ いつからでも、いくらからでも 簡単に始められます!

お申込み・お問合せは
当法人事務局 **03-6908-6571**

## 顔の見える支援 里親募集中!

ある特定の子どもの教育を、毎月一定の支援金で継続的にサポートする里親制度。一歩進んだ国際協力のかたちです。
里親と里子の間で、写真や手紙の交換をすれば（任意）、個人的なつながりが持て、子どもの成長を身近に見守ることができます。

詳しくは、当法人事務局まで。

外部の者から見ると、明らかに強者であるイスラエルが力で押さえつけるばかりでなく、二国家共存へ向けて事態の打開を図れないかと思いたくもなります。しかしイスラエル側には「被害者としてパレスチナ側と対等」という意識、いや図式といっていいものがあります。1948年の建国以来、迫害を受け続けたユダヤ人の砦として、取り巻く敵から国を守るという治安第一の意識が染み通っています。それに、イスラエル側の普通の人々には、分離壁の向こう側にいるパレスチナ人たちを絶望に追いやる窮状が見えないし、見なくてすむ状況にあります。したがって、普通の人を襲うパレスチナ人に対しては恐怖と憎しみが募るばかりです。そこには、圧倒的な強者として妥協も含めた事態収拾を考える、という構図はありません。

今月20日、イスラエルのネタニヤフー首相がエルサレムで開かれた世界のユダヤ人代表者会議の場で、ヒットラーはユダヤ人をドイツから追い出しこそすれ虐殺するつもりはなかったが、1941年に面会したエルサレムのイスラム教指導者（パレスチナ人）に大量虐殺を進言された、と発言しました。これはイスラエルの歴史学者からさえ批判された妄言ですが、このような発言は、ユダヤ人への迫害を思い起こさせ、パレスチナ人を加害者として印象付ける狙いがあったものと思われます。

今のように両民族が敵対感情を募らせている中では、「相手側の人間」と付き合うだけでも、特にパレスチナ側では、裏切り者扱いされかねません。当NPOの若者交流プロジェクトは、募集業務さえ難しくなるかもしれません。それでも交流事業の意味をあえて言うならば、イスラエル、パレスチナ双方にとって「反対側」が見えない、あるいは見ようとしない状況だからこそ、お互いに反対側を見させる窓をつくりたい、ということなのではないでしょうか。

## 子どもたちはあなたの支援を待っています！

聖地では9月に新学年が始まりました。皆様のご支援のおかげで多くの貧困家庭の子どもたちが、健全な教育環境で新学年を迎えることができました。子どもたちからも、感謝のメッセージが届いております。

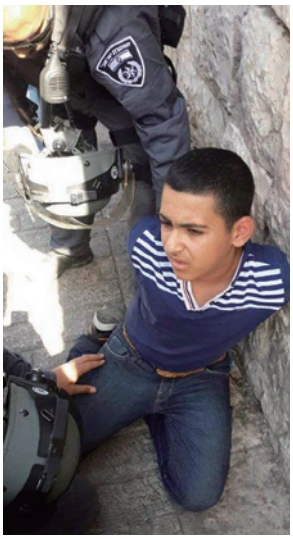
緊迫するイスラエル・パレスチナ、支援を必要とする子どもの数はこれから確実に増えるでしょう。子どもたちの健全な成長が、中東和平への道を開きます。なお一層のご支援をお願いします。

◀聴覚障害児のためのエフェタ学院で

## 脅かされる平和、子どもたちの心は今…

撮影者：ラミ・ハティーブ

撮影者：ラミ・ハティーブ



写真：イスラエル警察から一般公開

▲▶エルサレムで10代のパレスチナ人少年の逮捕が続く。

## 里子の家族からお便りが届きました♪

19 September 2015

Dear Sir,

I would like to thank you for your support to my daughter Annasstissia Gazzawi

In 6th grade in Schmidt school Jerusalem.

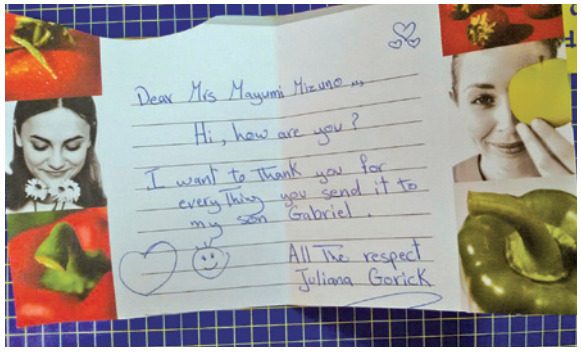
She felt very happy from your organization and your support to her.

Our best Regards,

Gazzawi Parent

◀▲アンナちゃん（11歳）と両親からのお礼状

▲アンナちゃんが描いた絵




◀ガブリエルくん（4歳）の母親からのお礼状

リラちゃん（4歳）と弟のイブラヒムくん ▶

## 街で出会った子どもたち

▲学校帰りの子どもたち。パトロール中の兵士に出会う（エルサレム）

▲「ボクは夢に向かって頑張るぞ！」（ガザ）

▲聖ヨゼフ学院の校庭で（エルサレム）